

# OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾンタクラブ第49号(2020年3月)



## 巻頭言

会長 内藤 恵子



新しい令和という年号にも慣れてきました。Zontaは、100周年のお祝いの年です。国際大会は、本部のあるChicagoで開かれます。“Zonta Says No to Violence Against Women” “End Child Marriage”が、今年のキャンペーンです。国際大会の登録は2月末まで、割安です。是非参加して、世界の女性たちの活躍も実感しましょう。



2019年11月卓話



2020年新年会

## 地区大会報告

幡山 玲子



2019年10月10日～12日、北九州市小倉において26地区第15回地区大会が開催された。

クラブからは、内藤会長、西村博子、幡山の3名が出席した。

一日目は「世界中の女性と子どもの幸せのために～いま、わたしたちにできること～」のテーマで、公開イベントが行われ、NPO法人 Gender Action Platform 理事の大崎朝子氏による基調講演と、パネルディスカッションが行われた。パネラーは Susanne von Bassewitz 国際会長と、Un Women 日本事務所所長 石川雅恵氏、UNICEF 東京事務所代表 木村泰政氏、UNFPA ミャンマー事務所ラカイン州事務所長 関根一貴氏の4名で、国連が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標であるSDGs(持続可能な開発目標)の第5目標「ジェンダー平等を実現しよう」を中心に女性が置かれている現状や児童婚撲滅への取り組みについて話された。

二日目は、ビジネスセッションが行われ、午前中は地区大会の会議の進め方の承認とガバナー報告・会計報告の後、地区や個人からの提案である3つの審議事項について討議された。

一つ目は、「国際女性デーを国民の休日にすることの法制化に向けて26地区として政府に請願書を提出すること」について諮られ、趣旨は賛成だがこれ以上休日を増やす必要はないなどの意見が出て、賛成12、反対52で提案は否決された。

二つ目は、「26地区内のエリア区分の見直し」について水野エリア1ADから提案された。エリア1は地区が広くエリア内の交通アクセスの面で役員の負担が大きいこと、クラブ数が少ないこと等を理由にエリアを地理的にではなく、経済的観点から分けることについて見直しをする提案であった。賛成53、反対7、棄権4で、今後理事会で検討を重ねることが承認された。

三つ目の提案は、地区からのもので、「男女同一賃金制度の実行を確実に進めるために」請願書を提出することについて、賛成33、反対25、棄権6で承認された。その後国際会長が6月に訪問されたヨルダンの現状について人道的な危機の中での回復の取り組みと題するプレゼンテーションが行われた。

午後のビジネスセッションでは各委員会からの報告があり、コーヒープレイクの後次期役員候補者が次々と壇上に立ち、立候補演説を行ない、それを受けてデリゲートによる選挙が行われた。複数立候補は指名委員だけであるが、残念ながら選挙結果については、翌日の発表を聞けなかったためわからない。というのも大型の台風の接近で新幹線が12日には朝一番の列車を除いて全部ストップするとのニュースを聞き、急遽翌日の予定をキャンセルして帰宅したからである。

翌日の早朝のメモリアルサービスに出席してクラブが大変お世話になった三宅定子さんのご冥福をお祈りしたく思っ地区大会に参加したのであるが、それを果たせなかったのが心残りである。心よりご冥福をお祈りいたします。

今回の地区大会は、公開イベントが行われるなど、今までにない取り組みをされ、記憶に残る大会であった。ガバナーはじめお世話いただいたゾンシャンにお礼申し上げたい。

## 地区大会公開イベントに参加して

西村 博子



母校の同窓会通信でUN Women 日本事務所所長の石川雅恵様の記事を拝見した私は、地区大会での公開イベントでパネラーとしてのお名前を再びみて、このイベントをとっても楽しみにしていました。

既にご報告がありましたように、この15回地区大会の公開イベントは、国際ゾンタと国連機関の結びつきならびにSDGs 目標5「ジェンダー平等を達成し、全ての女性および女児能力の能力強化を行う」ことを実現するために、クラブとして、個人としてどう行動したらよいのかを考える機会とすることを狙いとして企画されていました。

基調講演は世界の女性と子どもの幸せのために～今、私たちにできること～と題して、Gender Action Platform 理事の大崎麻子様です。この表題は今回の大会の一貫したテーマです。24年前からジェンダー平等、女性やガールズ（世界では思春期の女の子）のエンパワメントに関わってこられ、その推進には健康、教育、生計手段、参画（人権が尊重されて政治や社会に参加できること）が備わった時にエンパワメントされる。SDGsをフレームにして世界を変えていくことにすべての国が取り組むことなどについて話されました。

パネルディスカッションでは、国際ゾンタ会長 Susanne様、UN Women 日本事務所長 石川雅恵様、UNICEF 東京事務所代表 木村泰正様、UNFPA ミャンマー事務所ラカイン州事務所長 関根一貫様 からそれぞれの組織での特色ある活動の現状と未来に向かっての報告がされました。

ゾンタは児童婚の問題に取り組むなかで、教育の大切さを訴えています。ユニセフとパートナーシップで効果的なアプローチが可能とのこと。日本でも、ガールズや若者が変革の担い手になり、16歳以上の結婚の法律を変えようという動きがあります。一人ひとりの女性の人生が豊かで尊厳あるものであるために、エンパワメントするために、社会全体をどう持続可能なものにしていくのかと、今誰一人として取り残されない世界にするために、具体的な行動、取り組みが求められています。

児童婚が遠い国のかわいそうなお話ではなくて、女性の人権のお話であること、今日の講演で聞いたこと学んだことの発信、ネットワークの活用の重要性の求めに、深い学びとともに現実を痛感していました。



国際会長とともに

## ふたつの卓話報告

坂本 千代



2019年10月と11月の例会での卓話について報告します。

まず、2019年10月3日の例会では神戸大学大学院国際文化学研究科の岩本和子教授をお招きして、「ベルギー王室の歴史とイメージを辿る」というタイトルでお話いただきました。

日本では「ワッフル」や「チョコレート」以外はあまりよく知られていないベルギーについて、最初にその歴史が簡単に述べられました。もともとケルト系のベルガエ族がすんでいた土地にローマ人、その後ゲルマン人がやってきたので、ラテン系の言語とゲルマン系の言語の地域ができることになり、その言語境界線が現在まで続いて、フランス語、オランダ語、ドイツ語の3言語がこの国の公用語となっているのだそうです。スペイン、オーストリア、フランス、オランダの一部となったあと、ベルギーはついに1830年に独立しました。その際にドイツから招いたレオポルド1世が王位について立憲君主制国家となります。卓話では現在のフィリップ1世までの歴代7名の君主が紹介されました。

多言語・多文化が共存しているベルギーは、豊かな北部が独立を求めており、それによる政治的混乱（首相の長期不在）があって、王がその調停につとめたこともあったそうです。2013年に王位に就いたフィリップ2世の妻はベルギー史上初のベルギー出身者（それまでは皆他国の王族）であること、第一子王位継承となったため次は長女が王位につくこと、また、子どものひとりに障害があることを国民が知っていて、それを温かく見守っていることなどが述べられました。国歌の歌詞も3言語ヴァージョンがあるなど、日本では考えられないことがあたりまえに存在している国だということがよくわかりました。ベルギー王室の歴史とその在り方を日本の皇室と比較することができ、日本の常識が必ずしも世界の常識ではないことがよくわかって、とても興味深いお話でした。

11月14日には関西学院大学人間福祉学部大学院研究科の桜井智恵子教授に「子ども・地球の未来のために今、私たちにできること」という題名でお話いただきました。桜井先生は18歳のころに釜ヶ崎夜回り・炊き出しのボランティアをされていたそうで、その後、国立フィリピン大学に留学され、「公害輸出」「エコノミックアニマル」の高度成長期の日本のふるまいを間近に見られたそうです。

今の子どもの置かれた現実を知るため、我が国における児童生徒の自殺や、相対的貧困率と子どもの貧困率の関係などが述べられました。そして、日本の労働者の状況分析や、現代社会における「構造的暴力」（ヨハン・ガルトウングの言葉）や「規律権力」（ミシェル・フーコーの言葉）が人々にどのような影響を与えているかというご指摘などがあり、今の世界が直面している危機的状況が理解できました。このような社会で今できることとして、現在の状況がどう作られているか理解し、知識を人々と共有し、アンフェアな秩序を維持してきた社会や教育をひっくり返すくらいのことをしなければならないということ、そして子どもや若者の自由さにこそ希望があることを、グレタ・トゥーンベリさんらの例を引きながらお話しされ、聞き手の胸に迫るものがありました。ある程度経済的に恵まれた「おとな」である私たちの、未来に向けての義務は何なのかと大変考えさせられました。

10月と11月のふたつの卓話は、大学の教員による、面白くてためになるお話でした。このような卓話を聞いて仲間とそれについて語り合える、ゾンタクラブの集まりの貴重さをひしひしと感じました。

岩本先生、桜井先生、ありがとうございました！



抗議する若者たち



10月卓話の岩本先生(右)



11月卓話の桜井先生(左)

「ゆら (愉笑)」 訪問

辻 康子



2019年11月29日(金) ゾンタの愉快的音楽隊9名(牛田、笠置、中田、中塚、西村、幡山、宮本、芳川、辻)は銭太鼓を指導して下さっている新元先生と共に、中田会員のお世話で大阪市住吉区にある社会福祉法人 大阪重症心身障害児者を支える会「ゆら (愉笑)」を訪ねました。「ゆら」には18歳以上の重症心身障害児者20名が通所してきて生活介護を受けています。私たちは寄付金贈呈とともに銭太鼓3曲「さんぽ」「人間ていいな」「ゾンタソーラン」と、ハンドベル5曲「もののけ姫」「さんぽ」「エーデルワイス」「荒野の果てに」「きよしこの夜」を披露しました。

年に一度いろいろな施設訪問の為に、私たちは銭太鼓とハンドベルを5年以上練習してきました。小学校や中学校の運動会でよく披露される「ソーラン節」の南中学校版のメロディーに「ゾンタの愉快的音楽隊」のために、新元先生がオリジナルの振り付けをして下さった特別バージョンにもこの度新たに挑戦しました。平均年齢70歳を超えて正座も難しくなっている私たちにとって、テンポが速いソーラン節の習得はハードルが高いものでした。心の中で「これが最後」と思いながら、頑張っって何とか当日に漕ぎつけました。

「ゆら」の利用者さん達は銭太鼓やハンドベルの演奏に声を出したり、手に持った鈴を鳴らしたりしながら、私たちの舞台を楽しんでいるように見受けられましたし、私たちもリラックスしてパフォーマンスを楽しむことができました。彼らはテレビやビデオなどでしか、こういうものを見る機会がないので、とても喜んだとスタッフの方から言われました。

後日、副施設長さんの話によると、彼らに大切なのは経験を豊かにすること。彼らは自分自身で経験を積むことができないから、外部社会からの来訪者だけが彼らには新たな経験となるので、私たちの訪問は貴重な経験であったと大層喜んで下さいました。

完成度の低いパフォーマンスを携えての私たちの訪問は先方に実は迷惑なのではないか? 寄付金を渡すだけでいいのではないかと自問自答していましたが、副施設長さんの話を聞いて、私たちが風となって接点を増やすお手伝いできればと思いました。

「これが最後」ではなかった! 「ゾンタの愉快的音楽隊」それぞれ事情を抱えながらも、もう少し頑張れそうな気がしました。

だんじり祭

岸和田だんじり祭り

笠置 伸子



2019年9月14日、元大阪IIゾンタクラブ会員の萩原謡子様にお世話を頂き残暑の厳しい中、300年の歴史を誇るだんじり祭りを見に行きました。12時前に岸和田の駅で萩原様に迎えて頂き、参加者は元会員の鈴鹿有子様、内藤会長、牛田、坂本、辻会員と笠置の6名です。

12時過ぎに会場のCTLバンクに着きまして、このビルのオーナーである久場様の手作りの昼食が並べられており、私たちは炊き込みご飯、ちらし寿司、おでんなどを頂きました。

今年のだんじり祭りは9月14日、15日の2日間で午前は9時から12時まで、午後からは1時から5時まで宮入のパレードが34基行われます。各町内で揃いの衣装で老若男女、よちよち歩きの子供に至るまで統一された祭りの半纏を着、女の子は一条乱れぬ共通のドレットヘヤーをして細い鉢巻きをしています。岸和田のだんじり祭りは他の山車のように、ゆっくりと角を曲がるのではなく、勢いよく走りながら直角に向きを変えます。山車、屋台の重さは4トンを超え高さは4メートルもあり、その上でヒーローの大工方は急斜面の屋台のうえでそれぞれに合図を送り、「そうりゃ、そうりゃ」の掛け声と共に「やりまわし」を行い、その迫力とスピードは岸和田のだんじり祭りを上回る物はないとのこと。会場が角にありましたので次から次へと休む間もなく、山車が来て「やりまわし」を見ることが出来ました。3時過ぎに合間を縫って帰途に着く途中も道路の角で見ることができ、会場で見ているのとは違いスマホで動画を撮っていましたら今にも山車が傾きそうになり、毎年怪我人が出るのが実感致しました。

萩原様にはお世話を頂きまして、出席者一同感謝の気持ちを込めて御礼申し上げます。



## 秋のゾンタ旅行

芳川 た江子



2019年11月23日(土)から一泊で、私達7名(牛田・笠置・笹岡・幡山・堀・宮本・芳川)は、秋の萩・津和野旅行に出発しました。新山口駅の改札口で集合して、バスガイドさんが迎えにきてくれました。7名で大きなバスに乗り、一人一人ゆったりと座れました。まず最初に、昼食を秋芳ロイヤルホテルで取り、その後、黒谷入口の方から秋芳洞の中へ入り、下りコースの道を約1km歩きました。温度は、四季を通じて17℃と一定しているので、快適でした。洞内には、百枚皿や黄金柱など、見どころがたくさんあり、地下水によって造り出された神秘的な空間を堪能しました。

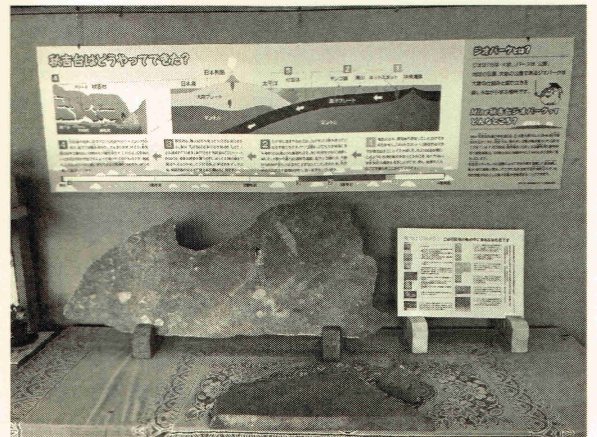
その後バスにて、萩城下町の方へ行き、松下村塾や明倫学舎を見学しました。萩は、松下村塾を主宰した維新の先覚者、吉田松陰や、松陰のもとで学んだ高杉晋作や伊藤博文、さらに藩校、明倫館で松陰に学んだ木戸孝允など、日本の夜明けを支えた志士たちのふるさとで、志士たちはやがて薩摩藩と薩長同盟を結び、明治維新の原動力となっていったのです。松下村塾は、吉田松陰を祭神として創建された松陰神社の境内にあり、明倫学舎は、吉田松陰も教鞭をとった萩藩校で、その跡地に建ち、今日まで授業が行われていた旧明倫小学校校舎が、新たな萩の観光地となりました。レトロな復元教室や幕末ミュージアム、世界遺産ビジターセンターなどがあり、萩の歴史を楽しく学びました。

その後、バスで和のオーベルジュ萩八景雁嶋別荘に到着しました。大浴場に行き、ゆったりとしてから、夕食をいただきました。河豚をはじめとする山口・萩ならではの地元の新鮮な魚介・肉・野菜を堪能させていただきました。また部屋も2～3人で一部屋で、ゆったりと過ごすことができました。

翌日は、バスで津和野方面に行きました。太鼓谷稲成神社を見学してから、殿町通りなどを案内してもらいました。太鼓谷稲成神社は、津和野のまちを見渡せる高台にあり、日本五大稲荷のひとつです。参道に連なる約1000本の鳥居は圧巻でした。SL列車が通るということで、鉄道ファンの方がたくさん集まっていますが、残念ながら私達は時間の関係上、SL列車を見ることはできませんでした。殿町通りは、津和野の白壁が続くメインストリートで、通り沿いの掘割にはりっぱな鯉がたくさん泳いでいました。又、ちょうど紅葉もきれいで、ノスタルジックな雰囲気にひたれました。

昼食は、割烹ひなの館で、旬の魚介類を堪能しました。帰りに、山口で五重塔を見学して、新山口駅に15時頃着き、解散となりました。

バスガイドさんと運転手さんがとてもいい人で、私達の希望を色々と叶えて下さり、またお天気にも恵まれて、大変満足した旅行になりました。



## 忘年会

### 2019年忘年会

尼木 純子



2019.12.07(木)に芦屋ベイコート倶楽部の中華料理{跳遊楼}にて大阪Ⅱゾンタクラブの忘年会を行いました。ベイコートのレストランはどこもとても美味しいけれど、特に中華とイタリアンは私の好みを満たしてくれました。

忘年会では 懐石風中華の品々が出てきたが、とても美味しいと感じるものを少しずつ何品も食べたいという気持ちを満足させてくれる内容でした。

先に 285 回目の例会を行ってからのくつろいだ楽しいひと時を過ごせました。

## 新年会

### 2020年新年会

牛田 三千子

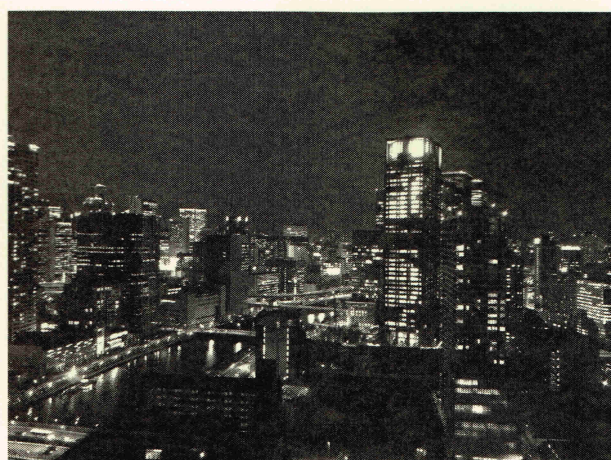
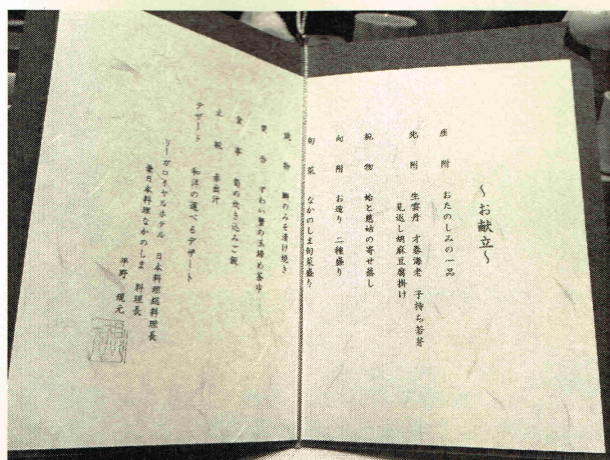


令和を迎えて初めてのお正月、その新年会は令和2年1月9日リーガロイヤルホテルの「なかのしま」で行われました。会場の「なかのしま」は最上階の30階、大阪の街が一望に見渡すことができ、光あふれる夜景が美しい最高の場所です。

お料理はお正月にふさわしい純日本料理で、先付から最後の水菓子までどの意匠も美しく舌も目も楽しませて頂きました。中でも吸い物(蟹しんじょう)は絶品でこれぞ和食の粋!と思わせる一品でした。

美味しいお料理を頂きながらも年末年始に起きた事件についての話題に花が咲きます。カルロス・ゴーン被告の逃亡劇には、皆驚きと憤慨の声。日本の司法制度が遅れているからと言い訳し、自分の行動を正当化する卑怯な態度には怒り沸騰でした。また第1回公判が開かれた「相模原やまゆり園」の報道を見て、何故このようなモンスターのような人格が出来上がったのか、との感想や、アメリカとイランの緊迫した情勢には第三次世界大戦がおきるのではないかと不安の声もあり、新年らしい明るいニュースが少ないことを実感しました。しかし2020年はオリンピックの年です。国がメダルの獲得数を競い合うような大会ではなくスポーツを通じこの殺伐とした世界を希望ある明るい年にしてほしいと願うばかりです。

大阪Ⅱゾンタクラブはこの6月で設立27年になります。会員23名の半数がチャーターメンバーあり、また半数が医師というのもちょっと珍しいクラブかもしれません。いろいろな職種のメンバーから多くの知識を得、仲良く奉仕活動ができるのもゾンタの楽しいところです。とりあえずは設立30年を目指して私たちが世の中にどのような貢献ができるかを考えつつ進んでいきたいと思ひます。



窓からの夜景

## 喜劇「道頓堀ものがたり」

久岡 眞佐代



当クラブの三林京子会員が2019年10月12日から11月5日まで、喜劇「道頓堀ものがたり」(京都四條南座)に出演されましたので、いくつかのグループに分散して観劇しました。

初演は平成12年であり、再演を重ねた名作です。大正から昭和初期の頃、芝居街として栄えた大阪・道頓堀を舞台に歌舞伎役者、劇場や芝居茶屋で働く人など芝居と街を愛する人々の笑いと涙の人情物語です。

主演の藤山直美さんは、芝居茶屋で働くお茶子さんの役であり、歌舞伎役者の夫をいわずに愛して生きる素朴な女性です。三林京子さんは、藤山直美さんの義理の母であり、芝居茶屋の女将さんの役です。お茶子さんをテキパキと指図する女将さん、NHKの朝ドラ「スカーレット」で主人公を厳しく指導する大久保さんの役は、最近の三林さんのはまり役になっているようです。

ベテランの俳優さんが多数出演される喜劇ということで、さぞかし華やかで笑い転げる舞台だろうと想像していましたが、大笑いというよりは思わずクスクスと静かに笑う場面が多く、笑いを中心とする喜劇ではありませんでした。むしろ俳優さん一人一人の長年にわたる修業の末に作り上げられた個性溢れる芸や人間性が混じり合ってハーモニーとなり、人の心をひたすら信じて生きていくことへの心地よさ、そのような生き方ができた時代への懐かしさを強く感じさせる作品でした。不寛容社会と言われる中、久し振りに心豊かなひとときを過ごさせていただきました。

最後に、なぜタイトルの冠に「喜劇」がつくのか、パンフレットに掲載されていた浅香哲哉氏(演出)の文章の中に答をみつけましたので、一部を抜粋させていただきます。

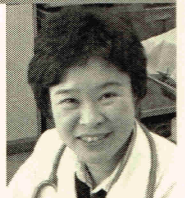
「・・・喜劇の本質は作品の中にあるというよりも、演劇という表現の中にあるのではないかと思うのです。・・・まさに喜劇こそ、作品を作り上げる役者さんそのものの中に喜劇の本質がある筈です。演じる役者さんそのものが喜劇なのです。・・・」



## ともだちの(わ)リレー・エッセイ

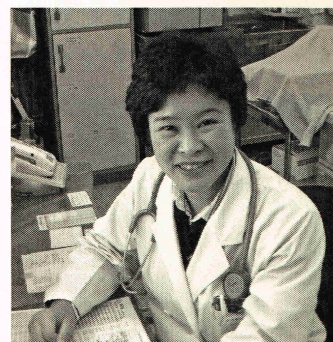
## 令和初めてのお正月

清水 聖保



暖冬のこの冬、インフルエンザも流行が遅く、ようやく年明けからはやり始めています。そんな中、令和初めてのお正月を心新たに様々な場所や、新しい飾り、しきたりで迎えられる方も多いかと思えます。

私は、ゆっくりとこの年末年始を例年になくお料理を楽しみ、映画鑑賞で過ごしました。毎日、バタバタしてお掃除も出来ない日々です。お正月は、ゆっくり家にいますので、冷蔵庫のお掃除をしては、家にある材料で何ができるかアプリからヒントをもらい冷蔵庫の整理も兼ねてトマトジュースを使ってのグラタン、黒豆パン、豆腐を盛り込んだフワフワホットケーキなどなどを作っては、子供たちと食べていました。飲み物は、プレゼントに頂きました生姜ペーストを牛乳に入れたり、ハーブティーに生姜を入れたりして体を暖めて過ごしました。そして部屋の整理をしていると昔なつかしの映画を録画したものが出てきましたので、一本ずつ見ていました。「明日に向かって撃て」、「モダンタイムス」、「ベンハー」、「風と共にさりぬ」と本当に懐かしいものばかりでした。幼い頃、わけもわからないまま連れて行かれてみた「モダンタイムス」は、風刺されている内容は、全く分からずでしたが、今は、無声映画ですが、内容の濃いものだと実感しました。どの映画も昔のもので、昭和、平成、令和と時代が移り変わっていく様を映画を見ながら感じると共に自分が三つの時代を生きていることをどこか不思議に感じています。時の流れは、早いのですが、そのひと時ひと時に心は大きなものを感じ思い出を刻み込んでいきます。こんなに好きなことをしながらお休みを過ごせたのは久しぶりです。令和の始まりにゆとりをもらえた気分です。



外は、例年に比べて暖かく、冬にゆとりを持っての年始、家の中も片付き、空間にもゆとりができました。心にもゆとりができると新しい年号にふさわしい新たな年を過ごせるのではないかと考えています。

私の今年の目標は、たくさん休みを取ること、自分のために時間を楽しむことです。こんな思いで令和の時代を毎日楽しく心豊かに過ごせたら日々笑顔でいられるだろうと信じています。令和の幕開けに素晴らしいお正月は、きっと令和の間ずっと頭に刻まれるものになると思います。

## 編集後記

令和初めてのリレー会報第49号にご協力ありがとうございました。私は皆様のお仲間に入れていただいて漸く2年経ったところで、会報を担当するのも勿論初めてのことでした。こうして原稿を拝見しまして、多岐に渡る活動を継続してこられたことに気づき感服している次第です。今後ともよろしく願いいたします。 中川 友里